

## 38

## 『養生問對 上』について

趙 青<sup>1)</sup>, 瀧澤 利行<sup>2)</sup><sup>1)</sup>金沢大学, <sup>2)</sup>茨城大学

## 緒言

『養生問對 上』は天理大学附属天理図書館にのみ所蔵されている江戸時代初期の写本である。『天理図書館稀書目録 和漢書之部 第三』には、この書(499-イ5)を「自然科学—医学」の項目に、華岡隨賢著『乳巖治驗論』、曲直瀬道三著『黄素妙論』と並べて収録されている。本書は和綴、薄茶色布目表紙、縦27センチ、横20センチ、1頁に12行縦書きで、全部で90丁あり、表紙の左肩に「養生問對 上」と書かれてある。前掲の稀書目録には、この書について「江戸時代初期写」と記されているが、本書には著述年代、著者などの書誌事情は一切記載されていない。

## 史料について

本書の1頁目は以下の内容となっている。

## 養生問對 上

一 一人きつたつてわれにつけていはく、むかしよりたびよにして、つねにくるしめらる

ねがはくは、いまへいぜいにちやかんようのようじようのみちを、をしえたまへよ、ついでに、又われらつねつねの、ふしんのことたつねべし、いかにもみみちかくさとしやすきように、おものがたりあれかし、

「こたえていはく、よいかなやとうこと、まことにちやようじようのかんようともにておおくそうらへ、そのうちのすてがたきことともものがたりもうすべし、又ついでに、ふしんのこととも、おたつねあるべきのよし、意にてこころへず(○○○○○○○○)てもそんしよりたることはもうすべし  
(原文縦書き、○は欠字)

書名は上記に示されているように、二重線で重ねられている。書名を削除するか、或は後に仮名に変更しなかったのかは不明だが、漢字のままでの使用を躊躇する姿勢が垣間見える。また、「上」と書いているが、「下」は現段階の調査では見当たらない。本書の続編を記すつもりがあったと考えられる。本書は書名の通り、質問とそれに対する回答を1項目として取り立て、質問と回答の文頭に上記のように印で表示され、さらに質問の右肩に漢数字で順番が付されている。全編にわたってこのような「問對」が51項にも及ぶ。体裁は文字表記がすべて連綿体で書かれ、漢字の使用は極めて少ない(「春夏秋冬」「人」「又」などぐらい)。これほどまでに仮名表記に徹した養生書は近世期を通じて極めて稀である。

各項の内容は古典書籍をほとんど引用せず、日常の体験や身近な事物の喩えを使い、養生の道と養生に関して不審に思うことについて、前引用のように「いかにもみみちかくさとしやすきように」と語っている。同時期の養生書に比べ、本書に使われている表現は洗練されたものではなく、むしろくだけた表現のほうが目立っている。著者の学識レベルが推測される一方、読者層の理解度に対する配慮も読み取れるだろう。

## 今後の方針

目下、この書物に対する先行研究は管見のかぎり見当たらない。今回の発表にあたって、本書の翻刻状況を報告しながら、書誌事情及び著作意図の分析を図り、本書の著者及び読者層を推測していきたい。江戸時代初期における身体や精神の養生に対する認識が読み取れるものとして、このような書物が養生研究の対象として十分に価値があるものと考え、養生書研究の些かの発展につなげたい。